



第 158 号 (2018)

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：山根美智子 館長：Dannie Otto & Barb Shenk

TEL (082) 503-3191

FAX (082) 503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

URL: <http://www.wfchiroshima.com/>

目次

1.	ワールド・フレンドシップ・センターでの生活.....	2
	WFC 館長 ダニー・オットー	
2.	WFC での最初の 3 か月をふりかえって	3
	WFC 館長 バーバラ・シェンク	
3.	WFC でのインターンシップ.....	5
	広島修道大学 中本龍希	
4.	WFC でのインターンシップ.....	6
	広島修道大学 三浦歩夢	
5.	PAX に参加して.....	8
	ウィルミントン大学准教授 ウルスラ・マックダガート	
6.	アメリカン PAX.....	10
	カーリー・プリチャード	
7.	平和文化村.....	11
	メアリー・ポペオ	
8.	バイオマス発電見学ツアー	14
	WFC 理事 車地かほり	

ワールド・フレンドシップ・センターでの生活

WFC 館長 ダニー・オットー

私たちがワールド・フレンドシップ・センターのボランティア共同ディレクターとして奉仕するため広島へ移転しようとしていた時、私は友人たちに自信を持って「日本に何かあるかわかっているよ」と言いました。私は日本へ2回行ったことがありまして、40年近くバーバラと彼女の家族に接していたおかげで、日本での生活についてかなりよく知っていました。それにもかかわらず、私はここでの生活を期待以上に楽しんでいる事に驚いています。



ダニー

私たちの職務の殆どは宿泊客をもてなすことです。予期した通り、これには清掃や朝食の準備などの日常的な仕事が含まれていますが、見返りは世界のいろんな場所からやって来る人々と素晴らしい会話ができる事です。これまでの所は、オーストラリア、ニュージーランド、タイ、シンガポールや香港など南半球の国々からのゲストが最も多かったようです。

私たちは、平和資料館の研究をしているタイの学者さんと特に思い出深い時を過ごしました。彼女は妹と姪を広島に連れてきたのですが、彼女の14歳の姪はヒロシマへの原爆投下に対する日本の若者たちの意見を研究するためにやって来ました。彼女は平和公園で学生たちにインタビューをし、バーバラと私からもこの仕事に志願した動機と平和についての意見を聞いたがったので、私たちはこの2点について長い会話を交わすことになりました。彼女は大変鋭い質問をしました。彼女のような若者たちによって私たちの未来の世界が創造されると考えると心が励まされます。

私たちのもう一つの任務は英会話クラスを教えることです。これらのクラスは1965年のW

FCの設立当初からありました。英会話クラスの収益はセンターの予算のかなりの部分を賄ってくれます。中には数十年も授業を受けている生徒さんたちもいます。正直に言って私は英語を教えることにはあまり期待していませんでしたが、今ではいくつかの英会話クラスが一週間のうちで最も素晴らしい時になりました。あるクラスでは John Hersey の古典 Hiroshima を読んでいますし、他のクラスでは Silent Voices を読んでいます。これは原爆を開発したマンハッタン・プロジェクトのロス・アラモスにおける物語ですが、第二次世界大戦中に強制収容所に送られた日系人たちの話や、アメリカ軍により暗号文を送る軍務を強制された”code talkers”として知られるナバホ・インディアンの話も入っています。人類に対する最初の原爆が炸裂した爆心地から 1 マイル以内の場所でこれらの物語を読むのは大変意義のある事です。

もう一つの楽しい仕事は食べることです。私たちは食事と日本食を楽しんでいます。WFCの近所に沢山あるレストランを探検するのが楽しみです。角のラーメン屋さんは最高です。

WFC での最初の3か月をふりかえって

WFC 館長 パーバラ・シェンク



パーブ

私たちは、猛暑の中の8月初めにWFCに来て、すでにもう広島美しい紅葉と冷気を体験しております。

WFC に来る前に、指導計画、ゲストの接待手順、諸設備の配置、平和公園や資料館の状況そして近隣の由緒ある自然の魅力などについて、おおよその考えを持っておりました。お仕事の仲間、生徒さんやゲストなど、どなたともお会いしたことはありませんでしたが、この方々との人間関係は、私たちにとって、最高に素晴らしく有難い貴重なものであるということを見出しました。

英語クラスは、非常な喜びとなっており、私たちはクラスで多くの友情関係を築き上げてきております。初日のクラスから、各々の生徒さんが

本当に深い考えを英語で思い切って伝えるのに、とても感動致しております。彼女たちは、課題の難しさからしり込みは致しませんし、それはしばしば彼女たちの意見をはっきり述べるグループの取り組みともなります。私たちは多くの生活体験をこんな方法で分かち合っております。さらなるおまけとして、広島地域の楽しめる訪問場所などについても学んでおります。

こちらに来る前の私の不安の1つは、1945年8月6日のテロへの絶えず続く非常に強い注目を私たちがいかに切り抜けていくかということでした。私たちは、本当に被爆者の方々から多くのお話をお聞きし、深く心を打たれ、嘆き悲しんでおります。恐怖は想像を絶します。それなのに、世界各国からのWFCへのゲストや広島の若い人たちに彼らの経験を伝えることを捧げて下さることに、私たちはとても感謝しております。

個々のお話は、まったく独特のものなのですが、私には、希望を見つけ出し、生きる強さという共通のテーマをお聞きできます。完全に打ちひしがれた彼らの生命力を保持できたのは、先生の声かもしれないし、緑の草の葉身、雲間に見える青空、新芽を出しているアオギリ、もしくは、もう一度咲き始めた夾竹桃かもしれません。

他の共通テーマは、核兵器のない世界のための働きかけへの熱烈な嘆願です。核兵器禁止の国連条約可決と最近のICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)への2017年ノーベル平和賞受賞に対する委員会の決定は、世界中に長年かけて主張し続けてきた、被爆者間の個人的な勝利の喜びのように感じられました。

これら被爆者の復活力と情熱は、彼らに耳を傾けるすべての人々を感激させています。とりわけ、WFCへのアメリカ人訪問者は、彼らがどこの出身かに関わらず、被爆者が表す親切と寛大さにも感動いたします。もし私たちが、こういう出会いが世界に長期効果を与えるかもしれないということを考えるならば、私たちは、バーバラ・レイノルズの言葉、「平和のための一期一会」を思い起こすでしょう。



バーブとダニー

ワールド・フレンドシップ・センターでのインターンシップ

広島修道大学 人文学部 英語英文学科 中本 龍希

・WFC に応募した理由

私は広島県で生まれ育ちましたが、あのとき広島で何が起こっていたのかについてあまりよく知りませんでした。いえ、自分がその事実を知るのが少し恐ろしかったという方が正しいと思います。ある日、テレビを見ていたとき他国から来た何人かの生徒が被爆者の方からお話を真剣な表情で聞いていました。その生徒たちは一生懸命に色んなことを質問し



被爆者の方にとっても話すのが辛いことであるのにその方は質問に対して生徒たちに語っていました。それを見たとき私は非常に心打たれると同時に広島の平和のために何もしていない自分に気づきました。それでここ、広島で何が起こっていたのか、そして広島がどんなに美しい街なのかを世界に伝えるために WFC に応募しました。

・インターンとしての WFC での仕事



インターンシップ報告会後のレセプション
後列 バーブ・シェンク、ダニー・オットー
前列 三浦歩夢 中本龍希 山根美智子

私たちは WFC で実習生として主に 2 つのプロジェクトがありました。一つ目は小さなプロジェクトでゲストガイドブックを更新するというものでした。私たちは WFC の近くのレストランに関する場所、営業時間、価格、そしてメニューの種類を調べました。もう一つは大きなプロジェクトで私たちが合計 7 人の被爆者の方からお話を聞き、次の世代に伝えるため動画を撮影するものでした。私たちにはこの話を世界中

の人々に伝える義務があるので、私たち、若い世代にとってこの活動を行うことはとても重要でした。

・インターンシップを終えて

私は WFC で様々なことを学ぶことができました。現在、国際問題はより複雑になってきており、ますます解決するのが難しくなっています。平和のためにも私はたとえすぐには行動に移せなくても一人一人が深く国際問題について考えることが最も大切だと思います。またインターンシップをとおして人の温かさを感じることができました。WFC の皆様は私たちへ親切にしてくださり自分たちの家族のような存在でした。私にとって最も大きな経験の一つだったと思います。WFC での 10 日、本当にお世話になりました。これからもずっと WFC とつながりを持っていきたいと思っています。



バーバラの碑を訪れて
中本龍希 三浦歩夢

ワールド・フレンドシップ・センターでのインターンシップ

広島修道大学 人文学部 英語英文学科
三浦歩夢 (Ayumu Miura)

これからワールド・フレンドシップ・センター、WFC での 8 月 31 日から 9 月 13 日までの 10 日間のインターンシップ報告をさせていただきます。まず、私がこのインターンシップに参加した理由から始めたいと思います。このインターンシップは大学の夏季休暇中に実施されるということで、WFC が英語を話せる場所である上に、広島での原爆や平和についても並行して学べる場所、機会であったために参加しました。

この10日間のインターンシップ中に大きく2つのプロジェクトを行いました。今回は、そのうちの“被爆証言の撮影”というプロジェクトをメインに報告します。このプロジェクトは“つたえる”プロジェクトの一環として原爆の記憶を若い世代や世界の人々に継承することを目的として行われました。計3日間の



被爆証言のビデオ撮り

宮地裕也 中本龍希 三浦歩夢 森下弘

うちに7名もの被爆者の方のお話を伺い、その様子を撮影させていただきました。7名それぞれ被爆の経緯が異なり、学徒動員で建物疎開をしている最中に、まだ胎児のときに、家族を探しに広島市に投下後に入ってきたなど様々でした。お話の最後には、7名全員に共通して“核兵器、原子力を含め核についてどう思われるか”“若い世代に何を最も伝えたいですか”という2つの質問をさせていただきました。

一つ目の質問に対しては、共通して、「核兵器は廃絶しなければならない、もう二度と原爆による被害者を出してはならない」また、私はそうとは思いませんが、「核兵器が依然として存在しているのは私たちの責任だ」などとおっしゃっていました。さらには、核の廃絶には若い世代の力が不可欠で、その中でも堀江さんの「人々は核兵器にばかり目が行きがちだが原子力発電所の廃止に向けても行動を起こす必要がある」という言葉に印象を受けました。



平和公園の碑巡り

中本龍希 三浦歩夢 山根美智子 オーストラリアからの家族

二つ目の質問に対しては、「まず若い人々は歴史、原爆投下の背景を知り、多くの人に伝えてほしい」とありました。絵や歌などどんな方法でも伝えようとすることに意味があり、特に被爆者の人数というのは決して多くはないため、若い人々が活動や願いを継承してほしいというのが共通した答えでした。

最後に今回のインターンシップを通して学んだことを紹介します。今回の経験で最も強く感じたのは、実際に社会に出て多くの方と接することの難しさです。当たり前のことではあるが、自分の仕事に責任を持つことの重要性、社会人、特に年配の方と話すときの言葉遣いなど基本的なことを改めて学びました。そして、英語のレッスンを通して、英語を学び始めるのはいつになっても遅くはないんだと一番感じました。多くの方は、社会に出てから英語を始めたにもかかわらず、私たちより断然に英語を話すことに慣れており、流暢に話され、驚きであるとともに、これから英語を学ぶモチベーションにもつながりました。この10日間で館長さんと多くの問題を英語で話す機会を多く作っていただき、私は常に英語で考えを表現することに苦戦しました。英語を学ぶことの難しさを改めて実感でき、英語を学ぶことの本質は世界で起こっている問題について英語で議論することではないかと感じました。そして、自分の生きてきた世界がいかに狭いものだったか、自分の知識と一般常識のなさも再認識できました。

私はこのインターンシップに参加する以前は、インターンシップは2回生がするものではないと思っていました。しかし、今回思い切って参加したことで、第一歩を踏み出すことの大切さを最も強く感じました。実際にやってみないと何が起こるかはわからないし、これからは常に自分が今何をできるかを考え、限られた時間を無駄にしないよう、多くのことに挑戦していきたいと思います。そして、これからは若い世代の代表として、WFC、核の廃絶に向けた運動にかかわっていききたいと思います。

PAX に参加して

ウィルミントン大学准教授
ウルスラ・マックダガート

2017年8月にPAXで派遣されて広島を訪れたことは、私の人生で画期的な出来事でした。第2次大戦で日本に原爆を投下したことには、以前からずっと反対でしたが、十分な時間と労力をかけて、被爆の実態を知るための努力をしたことはありませんでした。被爆者の体験談には、深く心を打たれ、学ぶところが多くありました。特に放射能による後障害には、心を痛めました。戦争では、爆撃の一瞬も言うまでもなく悲惨ですが、しかし生き残った人々が後から放射能障害に苦しむことを知って愕然としました。

近藤紘子さんの幼い従姉妹が放射能の残る市内に入り、その後死亡した話は聞くに堪えませんでした。堀江壮さんの家族の体験談にも、目を開かされ心を揺さぶられました。彼の家族は、戦後何年も経ってトラウマが去った後も、長年放射能に悩まされたそうです。世界が平和になった後でさえ、病と恐怖が被爆者の元を去ることはなかったのです。被爆者のそれぞれユニークな体験談や重複する話を聞くことができ、被爆当日、そしてその後何年にも亘って広島市民がどういう目にあったのかを理解することができました。



RERF(放射線影響研究所)訪問
案内のジェフリー・ハートさんとアメリカ PAX

クエーカーの大学の教授として、ウィルミントン大学と WFC とが連携する機会を持つことができ喜んでいきます。バーバラ・レイノルズの功績を知ることによって、自分の大学の特殊性を知ることができました。その上、この訪問を通じて、ウィルミントン大学や広島とより強い絆を築きたいと思い始めました。広島や日本各地にいる平和に関心を持つ学生たちに、ウィルミントン大学への留学を勧めたいと思います。この旅を期に、ウィルミントン大学の1年生への私の授業計画に、被爆証言や詩を取り入れたいと思います。そればかりではありません。私の6歳になる息子が学校で愛国的退役軍人のための活動に参加し、第2次大戦について教わって帰宅した時、まず最初に息子に話したのは、私の広島訪問のことです。息子は6歳ですが、日本は敵国だったと教わっていました。私は彼に原爆投下と広島で見聞きしたことを話しました。彼と事実に基づく会話ができたことは幸運でした。その子も下の3歳の子も、次回訪日する時は是非同行して、日本文化や歴史を学びたいと言っています。日本が単なるかつての敵国で



8月6日灯ろう流し

ウルスラ、リリー、ジュリア、カーリー

あったという以上に、より深く彼らが理解できるように、私が日本で現実に体験したことを、今は彼らに伝えることができることを喜んでいきます。

個人的な面では、この旅を期に日本語の勉強を始めたので、続けようと思っています。温かく親しみやすい人々と出会い、素晴らしい食事を食べ、日本文化を体験できとても良かったです。広島訪問の機会を与えてもらった WFC には感謝の言葉ありません。この体験はいつまでも大切に心に留め、できれば今度は家族全員で再訪できることを願っています。

アメリカン PAX

カーリー・プリチャード

今年の夏私は広島に旅する素晴らしい機会を得ました。日本 PAX との交流プログラムです。ワールド・フレンドシップ・センターがホストになってくれて、心温まるもてなしを受けました。今一度思い起こしながら、その体験をお話したいと思います。



ホームステイにて
田口知鶴子夫妻 ジュリア、カーリー

私は知鶴子さんのお宅に泊めていただきとてもラッキーでした。彼女はとても料理が上手で毎晩のように食事を作ってくれました。毎日、寝て、食べて知鶴子さんご夫妻と思いをわかつことで、日本文化を体験することができました。彼女の素晴らしいおもてなしに感謝します。

私たちは広島で沢山の有意義な経験をしました。平和公園を探索し、放影研を訪れ、縮景園や、ある日の午後は宮島にも行きました。カラオケを楽しみ沢山笑いました。しかもっとも大事で、厳粛に感じたのは盆の火送りの灯籠流しをする平和公園でした。

学生として、自分でいろんな文化を体験するのと同じく、教室で異文化を学ぶことが大切だと思っています。

私は、日本に行き、このような活気のある歴史的な街で、平和を学ぶ機会を得られたことを神に感謝します。

私は日本で学んだ多くのことをアメリカの友人や級友に話したいと思います。学校の“国際フード・フェスティバル”で お好み焼き を作っていましたが、広島で食べたような美味しいものになりませんでした。友達や家族は日本の人たち、特に被爆者の話を聞きたいと興味を示します。私は行く先々

で、彼らの平和に対する気持ちを伝え続けられることを誇りに思います。



原爆の子の像

カーリー・プリチャード

平和文化村

英語教育・公共社会交流ディレクター メアリー・ポペオ



広島市内より2時間北の町からこんにちは！私の名前はメアリーです。ワールド・フレンドシップ・センターは私の心の中でいつも特別な存在ですから、そのWFCを支援されている皆さんにご挨拶することができ、とても光榮に思います。私は2013年の夏、インターン生としてWFCに滞在しました。その間、親切なスタッフやボランテ

ィアの皆さんが、平和公園の案内をして下さったり、被爆者を紹介して下さいました。実際、WFCでのこの素晴らしい体験が、私が活動家となり日本へ移住する決断をする理由の一つとなりました。

私はボストン生まれで、反核主義を背景に育ちました。現在は、国際的共同体である、特定非営利活動法人平和文化村で働いています。ここは、広島県の田園地域にある施設で、平和学習を行う場所です。平和文化村の敷地内に住む多様で献身的な人々が、有機栽培農場を経営し、食糧と電力に於ける完全自給自足生活を目指して努力しています。そして、毎月行われる勉強会をサポートしています。紛争解決・持続可能な生活様式・有機栽培農業・

パーマネントカルチャー(永続性のある自然農業)などについての学習です。平和文化村(PCV)は、公益財団法人広島平和文化センター前理事長であるスティーブン・リーパー氏の描く未来像です。広島平和文化センターは、平



和記念資料館を経営しており、広島市の平和国際関係の一部門です。世界中で、戦争の壊滅的結末が明らかに見て取れるにも関わらず、人間の心や意思・会話、あるいは社会制度・経済制度・政治制度が、平和的文化を構築するためにどのように変わるべきかについての議論は、ほとんどされていません。それは広島においてさえもです。PCVは、この隔たりを埋めるため、周囲の人々との平和や自然との平和、そして自分自身の平和を促進するための実施訓練や技術面に基づいた訓練を提供しています。

ボストンに住んでいた時、私は、グローバル・ゼロのためのアクション・コアのリーダーを引受けました。アクション・コアとは、核兵器廃絶のための行動を先導する、国際的な若者の団体です。私はその団体のリーダーとして、デモ行進や署名活動を先導したり、議会や国連大使へ働きかけたり、ゲリラ・アート活動(※)に参加したりもしました。それは、大変途方もない体験でした。

※ゲリラ・アート:しばしば社会的・政治的な主義主張に基づき公共空間において無許可かつ匿名で行なわれる表現行為

しかしながら、間もなく私は岐路に立っている自分を感じました。私は人を説得できるタイプの人間ではありません。実は、私は簡単に人に説得されてしまいます。ある時私は、核兵器の違法性・非人道性について説いていたのですが、逆に、相手の話に耳を傾け、あげくには、私の話を理解しにくくするような微妙なニュアンスの見解に惑わされてしまい

ました。私の下した結論は、相互理解と紛争解決に焦点を当てた平和活動が私にはより適している方法だという事です。PCV で働く事は私にとって、この道筋を探索する好機でした。

PCV には様々なタイプの人があります。お金持ちの人やそうでない人、宗教に熱心な人や無神論者、自由主義派の人や保守派の人など。もちろん私たち自身の間でも仲たがいはありますが、私たちは全員、平和的文化を理解するために貢献しているので、決してあきらめることなく一緒に働き続けています。嫌いな人との生活が、実は最も貴重で、私の平和構築訓練を啓蒙することなんだと気が付きました。



皆で一緒に土を耕して食糧や電力を生み出す事は、平和的文化の大事な要素です。畑を耕すことで、私たちは問題解決のための十分な機会を持つことができます。つまり、一つのグループとして問題に取り組み、どう解決していけばよいかがわかってくるのです。一緒に野菜を育て、暖をとり、共に愉快的な時間を過ごせば、お互いがお互いを信頼していると解ります。一見、解決困難に見えるもめ事や意見の相違であっても、協力するよりほかないのです。PCV では農業そのものが、紛争解決の手段なのです。

広島に住んでおられる皆さん、あるいは、もし他国や他県からたまたま広島を訪れている皆さん、どうぞ平和文化村へお立ち寄りください！

PCV の最新情報は、以下のウェブサイトかフェイスブックでご覧いただけます。

ウェブサイト：http://www.peacoinstitute.org/peace_culture_village

フェイスブック：<https://www.facebook.com/PeaceCultureVillage>



真庭バイオマス発電見学ツアー

WFC 理事

車地かほり

WFCピースセミナーは2017年6月8日から9日にかけて岡山県真庭市にバイオマス発電見学ツアーに行きました。島根原発、伊方原発に続き3回目のフィールドワークでした。いつものように講師の木原省治さんがレンタカーを運転して下さり総勢6人で向かいました。真庭市は岡山県の北部に位置し9町村の合併により誕生しました。岡山県の自治体の中でも最大であり市内の森林面積は約79%と森林資源の豊富なまちです。この豊かな森林資源を活かし約20年前から「バイオマス事業」の先進地として国の内外から注目されています。2015年には国内最大級規模1万kwのバイオマス発電所も稼働しました。



真庭市議会内にて

(清水美喜子、渡辺朝香、車地かほり、渡邊道子、柿本真庭市議、木原省治、田口知鶴子)

真庭市役所本庁舎に到着すると柿本健治市議の案内で2階にある市議会の内部を見学しました。さすが森林王国だけあって家具や内装はほとんど木材で造られていました。その後も柿本市議の案内で真庭の市内を見て回りその夜は露天風呂で有名な湯原温泉に投宿しました。翌日はいよいよ本題の真庭バイオマス見学ツアーに参加しました。真庭



市役所に集合してバスに乗り出発です。着いた所で最初にバイオマス産業都市概要の説明を聞きその後木質バイオマス発電所を見学しました。国内最大級と言うだけあって大きなパイプが何本も複雑に伸びていて私達はその中を縫うようにして見て回りました。真庭地域の間伐材など未利用木材や樹皮などを主燃料とする大規模発電施設です。次に真庭バイオマス集積基地に行きました。ここは発電所の燃料供給拠点です。1964年の木材輸入の完全自由化により外材が大量に輸入され国内の木材価格は大きく下落しました。一方真庭市では放置された未利用木材をバイオマス資源として活用する様々な取り組みを実践しています。最後に真庭市役所に戻り100%自然再生エネルギーで稼働する市役所の設備を見学しました。冷暖房チップボイラー、太陽光発電、電気自動車の充電器などです。

ツアーの後は買い物を楽しんで帰路につきました。中国山地の一角で持続可能な循環型社会を実現するべく様々な取り組みが実施されているのを目にして将来に一条の光を見た思いがしました。と同時にこの先進的な試みが世界各地に広がる事を心から願わずにはいられませんでした。

注) バイオマスとは「動植物から生まれた再生利用可能な有機性資源」のこと。主に木材、海草、生ごみ、紙、動物の死骸、ふん尿、プランクトンなどを指す。バイオマス資源を燃料とした発電はCO2を排出しない。

友愛編集委員： ジム・ロナルド、山根美智子、車地かほり、三村庸子、
兼網寿美子

翻訳者： 池田美穂、車地かほり、清水美喜子、三村庸子、山根美智子

発行者 特定非営利活動法人ワールド・フレンドシップ・センター

発行所 〒733-0032 広島市西区東観音町 8-10

(C)NPO World Friendship Center 2017

無断転載、複製を禁ず